様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３２７０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０１１９

研究課題名（和文）ジャポニスム以後の日本美術・工芸研究の諸相：ジョルジュ・ド・トレッサンを中心に

研究課題名（英文）Japanese art studies after Japonisme: the era of Georges de Tressan

研究代表者
南　明日香（Minami, Asuka）

相模女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：２０３２９２１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：1880年代から第一次世界大戦後迄の日本美術研究の実態の総合的な解明を目標に、仏、英、独、白、米の研究者（トレッサン、ミュンスターベルク、ジョリ、ペトリュッチ等）の業績及び研究機関や出版物の調査、書簡の解読によって、情報交換し影響を与えつつ水墨画や鐔などの研究を進めていた事実を明らかにした。日本から欧米に発信したThe Kokka等の文献について調査、分析もした。
成果は学会発表３回、講演1回、論文５本、共著3冊と、最終的に一次資料（書簡、メモ、草稿、写真）の翻刻、参考文献、書誌４本を含む単著『国境を越えた日本美術史　ジャポニスムからジャポノロジーへの交流誌1880-1920』に結実させた。

研究成果の概要（英文）：This research is an attempt to clarify the interactions between the works of Western and Japanese historians of Japanese arts during the transitional period from amateurism to Japanese studies (1880-1920). The results are given in seven papers and one book.We focused on institutions, collectors and historians, as well as on the main periodicals. We analyzed the publications written in Western languages by Japanese art historians. This investigation visualized the life and works of four art historians: Georges de Tressan, Oskar Munsterberg, Raphael Petrucci and Henri L. Joly, referencing the primary documents such as letters, notes, and photographs. The lists of bibliographies of these persons have also been drawn up.
We now understand the characteristics of the studies of yamatoe, Muromachi ink painting and ancient Chinese paintings, as well as that of sword-guards written by these four historians and others, for example: L. Binyon, H. P. Bowie, W. Cohn, Seiichi Taki, Kyusaku Akiyama.

研究分野：比較文学・比較文化

キーワード：ジャポニスム　ジャポノロジー　日本研究　工芸　日本絵画　日本美術史　國華　鐔

１．研究開始当初の背景

（１）19 世紀後半の欧米での日本美術の評価について関心が高まり、特定の研究家のコレクションや蔵書、著作について調査や資料の翻刻がなされていた。

（２）1900 年のパリ万国博覧会とその折に執筆発行された日本美術史『稿本日本帝国美術略史』について研究がなされ、同時期の『真美大観』や『國華』で紹介された美術・工芸作品の図版や、欧米の審美観に合わせて整えた日本美術史によるナショナル・アイデンティティの創出について研究が進められていた。が、欧米言語による具体的な反応は、確認できていなかった。

（３）研究代表者はすでにジョルジュ・ド・トレッサンの遺品を整理し書簡、メモ、草稿、資料写真などの撮影や翻刻をしていた。そして生涯と業績、研究者同士の情報交換の様相、古代仏教美術とやまと絵研究と浮世絵辞典についてその発表までの背景と経緯と情報の源泉を調査し、特色を分析していた。

（４）研究代表者はさらに、オスカー・ミュンスターベルクの旧蔵書を東北大学附属図書館で調査し、1880 年代から第一次世界大戦後にかけて欧米で発表された、東アジア研究の単行書や雑誌論文などを通じて全体像を明らかにしつつあった。

２．研究の目的

1880 年代から 1920 年頃までの間に欧米で日本美術・工芸の研究がどのようになされ、どのような評価をして、どのような経緯を経て発表されていたのかを包括的に解明する。この時期は日本の美術・工芸に対するアプローチが、趣味としてのジャポニスムから日本研究としてのジャポノロジーへと向かいつつあった重要な、しかし研究が進んでいない過渡期であった。また日本側がどのように欧米の反応を受け止めた上で、発信していたかを具体的な論文を通じて突き止める必要があった。軸としてトレッサンを中心にし、相互に影響を受けた研究家達も視野に入れ、それぞれの業績を相対的に評価し位置づける。これによって情報の散漫な記述になることを避け、立体的に理解できるようにする。

（１）まずはトレッサンの仕事に関する研究を完成させる。そのために、鐔と室町水墨画の研究論文を分析し、情報の源泉や研究家同士の情報交換の様相、論争の経緯などをあきらかにしたうえで、同時代の欧米の研究家の論考との差異を明らかにする。水墨画については中国の画論や南宋を中心とした絵画の知識の源泉も押さえる。これによってすでに研究代表者が調査済みのやまと絵も含めて、当初は海外で蔑視されていたジャンルについての評価の変化を明らかにする。

（２）フランス以外での研究の状況を知るために、ミュンスターベルク、ジョリ、ペトリュッチの東アジア美術・工芸研究家としての業績を明らかにする。それぞれの書誌と蔵書リストを完成し、複数の論争の経緯と背景を跡づけ、論考の特色を明らかにする。

（３）日本側からの影響をおさえるために、欧米向けに発信した美術全集、論文、単行本を見出し、その論調の性格と図版の傾向を明らかにし、海外への影響力と発信の方法を確認する。

３．研究の方法

（１）ジョルジュ・ド・トレッサンについては、フランスの子孫の元にある遺品から関係する書簡や草稿類を解読する。実際に出版された論考だけでなく、それを発表するまでの経緯や、日本語の学習環境、関係した展覧会やコレクターへの言及なども取り上げる。

（２）オスカー・ミュンスターベルクについても同様の方法によって研究を進める。伝記的資料については、子孫から提供のあった手記などを用いる。使用していた画像資料のファイルも東北大学附属図書館が保存していたことを突き止めていたので、それを調査。また所蔵までの来歴を東北大学史料館、太田正雄関係で神奈川近代文学館などで調査。

（３）さらに彼らと関係が深く相互に影響を及ぼしていたラファエル・ペトリュッチとアンリ・L・ジョリについてブリティッシュ・ライブラリーの草稿部門、ギメ美術館図書館、フランス国立東洋言語文化図書館、フランス国立装飾美術館図書館、東京大学東洋文化研究所、早稲田大学図書館、国際交流基金情報ライブラリーなどで調査して、書誌を作り論考を分析し、実際の活動の現場をおさえるべく書簡を解読する。ペトリュッチ関係ではオーレル・スタインやエドゥアール・シャヴァンヌの中央アジア莫高窟研究のシリーズの著書も調査する。

（４）日本から絵画向けに執筆し編集した日本美術文献（*Histoire de l'art du Japon, The Kokka, Selected relics of Japanese art, Masterpieces selected from the fine arts of the Far East* 等）の欧米言語による説明の解明と、日本語版との違いの比較、欧米の研究者に与えた影響や、それぞれの版元の海外での出版展示の調査をする。

（５）西欧での美術館などでの日本の美術・工芸作品の受け入れの歴史を確認するために、ハンブルクの美術工芸博物館、オックスフォードのアッシュモリアン美術館などを見学し、当時出版されていた東洋美術関係の紀要や雑誌も閲覧する。

４．研究成果

（１）①ジョルジュ・ド・トレッサン（仏、1877-1914）については、まず彼の一連の室町水墨画論における情報の源泉を確認した。英文版の美術雑誌 *The Kokka*（『國華』）、英日二言語による美術全集の *Selected relics of*

Japanese art（『真美大観』）、『稿本日本帝国美術略史』の原本である 1900 年発行のフランス語版 *Histoire de l'art du Japon* を初め、当時フランスで入手できた日本の歴史、日本と中国の絵画、中国の画論に関わる著書を調査した。その結果初期ではウイリアム・アンダーソン（英、1842-1900）、ルイ・ゴンス（仏、1846-1921）やピエール・バルブトー（仏、1862-1916）など日本美術研究の先駆者の著書と、『帝国美術略史』を参考にしていたものの、その後画像では前記日本から欧米向けに発信された３点が中心になったことが分かった。これはなによりも図版の質の高さ、真作として日本側から認定されたことがあった。文字情報では、主幹の瀧精一（1873-1945）が *The Kokka* で外国人向けに日本美術の独自性を打ち出した一連の日本の絵画と書と中国の絵画や画論について執筆した論文が、参照されていたことが分かった。瀧のフランスでの講演や交流の記録が見つかり、審美書院ではバイリンガルの『真美大観』『東洋美術大観』の英語版の他に、ロンドンとパリでの出版事業も新たに判明した。

とはいえトレッサンについていえば日本からの情報を鵜呑みにしたわけではなく、それらを踏まえた上で独自に雪舟や狩野元信等の特色を見出しそうとしていたことも分かった。さらにアメリカ人の水墨画家であるヘンリー・パイク・ブイ（1848-1920）の著書から、実際に筆をとって水墨画を描く絵師の身体性やその精神性を、「こころもち」などの言葉でより深く理解しようと努めていたことが明らかになった。中国の代表的画論である『芥子苑画伝』『林泉高到集』などの、日本と西欧での応用的解釈も明らかにした。成果は論文「ジョルジュ・ド・トレッサンの室町時代の絵画論――水墨画はどのように評価し得たか」にまとめた。

②またトレッサンが晩年に最も重要な仕事をしたレンヌ市で、ブルターニュ地方と日本との関係をめぐる一連の催事があり、2013 年 9 月にジャポニスムに関するシンポジウムが企画された。これに応募し採択され、« Georges de Tressan (1877-1914), officier, historien des arts japonais et collectionneur de gardes de sabre, autour de ses années à Rennes »のタイトルで発表した。このときにレンヌ大学の先生方からの協力を得て、トレッサンの伝記的背景に関する貴重な資料を得た。発表原稿は大幅に加筆した上で、フランス語で活字化した。

③ギメ美術館学芸員ジョゼフ・アッカン、メルキュール・ド・フランス編集長アルフレッド・ヴィシエール、巴里日仏協会の書記エミール・アルカンボー、出版社のヴァネスト、洋画家の山下新一郎、日本語教育のパイオニアのレオン・ド・ロニ等からの書簡を通して、日本語学習から単行本や論文の出版までの事務的な経緯、講演会の開催準備がわかり、それによって日本美術を研究して成果を発表するまでの現場の状況が見えてきた。

（２）水墨画に関しては、トレッサン以外の同時代の欧米での評価はどのようであったかを確認した。初期のウイリアム・アンダーソン、ゴンス、バルブトーから、アーサー・モリソン（英、1863-1945）、大英博物館学芸員のローレンス・ビニヨン（英、1869-1943）、ミュンスターベルク（独）、ヴィリアム・コーン（独、1880-1961）、ブイ（米）、ラファエル・ペトリュッチ（伊・白、1872-1917）、アーネスト・F・フェノロサ（米、1853-1908）の水墨画論を分析した。

その結果、初期では西洋絵画との比較から遠近法も明暗法も理解できていない未熟な作品とその稚拙さをあげつらうないし、日本の画商からの受け売りの要素が強かったのが、日本側からの情報が増えるに従い、それに基づいて的確な歴史的評価をしていたこと、またより精神・思想的な背景をふまえて表現を理解しようとしたことを明らかにした。室町水墨画を論ずるには、中国の画論と南宋時代を中心とする絵画についての知識が必要になり、それについてもペトリュッチ、ビニヨン、フェノロサの間で考察が進められていたので、それぞれの理解の特色を突き止めた。成果はジャポニスム学会主催のシンポジウムで発表した上で、発表原稿に大幅に加筆し、論文「西洋における水墨画の受容:コレクション紹介と文献絵画史の時代」としてまとめた。

（３）鐔についてはトレッサンと交流のあった刀剣・刀装具研究の重鎮の秋山久作（1844-1936）、アンリ・L・ジョリ（仏・英、1876-1920）、アレクサンダー・ゲオルク・モスレ（独、1862-1949）などの書簡や、外国での鐔の蒐集事情に通じていた桑原羊次郎（1868-1956）の文章から、日本と欧米でほぼ同時に鐔研究が始まり、国境を越えて情報交換がなされていた、その状況を解明した。その上で彼らに注目されていた画風の創始者と言われる金家の鐔の魅力を確認し、トレッサン、秋山、ジョリ、モスレの間で鑑定の基準について論争があり、その結果が日本の『刀剣会誌』にも反映されていたのを実証した。

またトレッサンの最後の鐔論である「新たなる日本刀の鐔の歴史研究補考」が和田維四郎の『本邦装剣金工略誌』の翻訳であると同時に、秋山からの情報と独自の調査も加えた画期的な論考であり、当時はもとより今日でも参照されていることを明らかにした。成果は論文「二〇世紀初頭の鐔研究――ジョルジュ・ド・トレッサンを中心に」にまとめ、同論はフランス語に翻訳された。

（４）①すでに研究代表者の調査により、オスカー・ミュンスターベルク（独、1865-1920）の旧蔵書が没後の 1924 年に売り出され、東北帝国大学図書館に収められたことが分かっていた。その東北帝国大学側の購入までの経緯と、旧蔵書の内容を把握すべく調査した。

神奈川近代文学館の木下杢太郎資料などから、当時フランスやドイツに滞在していた木下（太田正雄、1885-1945）と児島喜久雄（1887-1950）が関わっていたこと、ミュンスターベルクの仕事が日本でも知られていたことがほぼ突き止められた。また旧蔵書は現在の東北大学附属図書館川内キャンパス本館書庫のなかに点在しており、その全体像を把握するのは困難を極めたが、調査を重ねた。

②売却時のリストも複数種類発見出来た。それらからおよそ 1300 点の書誌的情報をリスト化した。そのなかで画像情報として『國華』などを切り抜いていた中国と日本の美術・工芸品図版のポートフォリオ群に、38 点の主題別・研究者別論文抜き刷り・カタログ・雑誌と新聞切り抜きの大型ファイルも新たに発見できた。それぞれの内容の目録を作成し、これらから当時日本美術を扱っていた雑誌の情報、研究機関などを改めておさえ、同時代に東アジア美術研究のためにどのような資料がどのような機関から出ていて、それをどのように活用していたのかを調べることで、この時期の研究の現場が見えてきた。

（５）ミュンスターベルクの業績を調査している中に、子孫を見つけ出すことが出来、手記の提供を受けた。そこからまた、アメリカに亡命後東アジア美術研究者となった子息のヒューゴ・ムンスターバーグの情報を得て、それぞれの業績（伝記と書誌）を、雑誌等を調査して作成した。成果は Münsterberg & Munsterberg: Two ways toward the study of East Asian Arts のタイトルで、国際アメリカ研究学会（IASA）第６回国際大会で発表。これによって 1880 年代から 1970 年までの東アジア研究の大きな流れをつかむことが出来るようになった。日本美術と中国美術が不可分なものとして研究され、これが 20 世紀初めの欧米側からの莫高窟の発掘調査から、日本と中国の外交的文化戦略、日本の自国の文化財の保護と中国での辛亥革命前後での宝物の海外流出などを経て、次第に日本の美術のイメージが固定化されていったことなどを見た。さらにヒューゴ・ムンスターバーグの、西洋で最初の民藝についての書物を著したという看過されてきた功績も、論文「東洋美術史家ヒューゴ・ムンスターバーグ(1916-1995)の軌跡: 中国古代美術から日本の民藝まで」（著作の書誌を含む）で評価した。

（６）出版社からの依頼論文であったが、２０世紀前半の「フランス語に翻訳された「日本文化」」について執筆することになり、トレッサンを含めて歴史、民俗学、文学、言語などの領域でどのような書物が出版されていたのか、その著者のプロフィール、日本研究・日本紹介の機関を調査することになった。フランスの図書館と日本の大学附属図書館、ミュンスターベルクの旧蔵書リスト、国際交流基金情報ライブラリー所蔵の資料によって、明治 10 年代から第一次世界大戦直後にかけてのジャポニスムの時代に、紹介や研究が飛躍的に進んだこと、その後むしろ中国に興味が移り美術では浮世絵以外は停滞気味であったこと、そして現代では両大戦間の研究はあっても、この隆盛の時期の研究がなされていないことが改めて痛感された。

（７）これも依頼論文「一九世紀末の日本研究　レオン・ド・ロニ文庫」のために、フランスで初めて公の機関で日本語を教えたレオン・ド・ロニ（1837-1914）の蔵書について調査と紹介をした。リール市立図書館にまとまって収められている蔵書が中心になり、既に作成されていた目録の検討と実際に現地での調査を行った。これで東インド会社や宣教師の時代から 19 世紀後半にかけての、日本と中国の研究の様相が、ミュンスターベルクの旧蔵書との比較もすることで、より多角的に見えてきた。また調査中にトレッサン宛を含む 5 通の書簡を発見でき、それを子孫のロニ・アーカイヴ作成者に伝えた。

（８）以上の調査と分析から、1880 年代から 1920 年頃までの欧米での日本美術と工芸の研究に関して包括的に情報をまとめた著書、『国境を越えた日本美術史　ジャポニスムからジャポノロジーへの交流誌 1880-1920』を出版することになった。そのために新たに以下の調査と分析をし、執筆した。

①本書の第一部では、背景となる欧米での、この時期の英・独・仏・墺・米・白の日本文化関係機関の活動と出版物、美術館・工芸博物館を中心とした日本美術・工芸品の入手と展示の様相を押さえた。当初は民俗学的な関心が強く、室町時代以前のやまと絵や水墨画はむしろ蔑視され、古代の仏教美術は存在すら知られておらず、障壁画も純粋な絵画作品とは見なされず、応用美術という一段階下の格づけにあった。それにひきかえ庶民の娯楽品である浮世絵には最大級の讃辞が捧げられ、工芸品の中でも漆器や根付け印籠はもとより鐔が、明治の末には一級品はほぼ海外での所有になったと嘆かれたほど人気があった。が、徐々に日本側からの情報も踏まえて、研究的な立場から蒐集を行う気運が高まってきたことを資料をもとに説明した。

一方で日本側からもこうした海外での日本の美術をみるまなざしを受け止めて、西洋向けに博覧会や欧米語での出版物を通してアピールに尽力した。1900 年開催のパリ万博での帝室御物や寺社の秘宝の展示の経緯とそのインパクト、本邦初の近代的日本美術史になる *Histoire de l'art du Japon* の影響力と限界を、具体的な当時の反応をもとに解明した。

②本書の第二部を中心に、トレッサン、ミュンスターベルク、ペトリュッチ、ジョリについて、それぞれの伝記と著作の書誌を作成し、子孫の元やブリティッシュ・ライブラリーに保存されていた書簡から、彼らの研究の進捗、

研究家の相互評価、チャールズ・フリーア（米、1854-1919）、グスタフ・ヤコビー（独、1856-1921）などのコレクターとの情報交換の様子を解読し、どのような資料を得て、情報を交換していたのか、講演会でまた活字メディアを通してどのように持論を発表しようとしたのか、彼らの業績が埋もれた歴史的経緯も含めて、その現場を明らかにした。
日本美術をジャポノロジー研究へと向かわせる牽引ともなった、オーレル・スタイン（匈・英、1862-1943）やエドゥアール・シャヴァンヌ（仏、1865-1918）、ポール・ペリオ（仏、1878-1945）等の中央アジアの莫高窟調査の研究との関わりも実証した。最晩年のフェノロサの西欧での評価、日本美術研究を切り開いた瀧精一とペトリュッチらとの仕事も発見した。フェノロサの遺著『東洋美術史綱』におけるペトリュッチの功績、岡倉天心の「評判」などにも触れた。
ミュンスターベルクとベルリン民族博物館東洋部長であったオットー・キュンメル（1874-1952）及び、トレッサンとジョリとの論争、編集者や学芸員との交渉といった背景を一次資料などから明らかにすることで、日本美術研究に携わる者の苦心やその後の評価に関わる人間関係などが見えてきた。その上で、目に見える表現の理解に止まらずその背景、精神性も含めて異文化を理解しようとした姿勢と残された言葉を解明した。
彼らの成果は同時代の日本でも原勝郎や瀧精一などにより高く評価され、参照されていた。<日本美術史>というナショナル・アイデンティティは、こうした所属する国や言語の違いを越えてのインタラクティヴな情報提供と、理解の上にできあがったことが実証できた。彼らは現在でも著書の再版のある日本美術・工芸研究家であるが、従来は調査の手立てがなかったために取り上げられなかった。したがって代表研究者作成の書誌が、今後の研究の基礎情報となる。
③本書第三部ではトレッサンの論考を中心に、書簡や資料写真といった一次資料も踏まえて、ようやく緒に就いたジャポノロジー（日本研究）の一環としての日本・工芸美術研究の実際を明らかにした。中央アジアの莫高窟の発掘調査の成果に基づく古代仏教美術、やまと絵の再評価、水墨画の評価の歴史、鐔研究の現場とその日本への影響などを説明した。これまでに挙げた欧米の研究家の論考の特色についても、発表論文に大幅に加筆した。フェノロサの遺著『東洋美術史綱』について、その好みや絵画描写の特色について分析した。
④本書では本文中に人名の原綴と生没年、可能な限り略歴も記し、巻末に参考文献を掲載した。これによって本書の、ジャポノロジーへと向かう日本美術・工芸研究に関わった諸人物とその業績、現在までの日本と諸外国での研究の成果のわかる基本文献としての役割を強化した。本書で実証したのは、従来の研究家一人を取り上げてその書いたものを分析するという方法では見えてこなかった研究者たちの取り組みの現場であり、広く同時代の文脈に照らし合わせた本書によって、初めて明るみになった。近年学会でも書簡や在外日本機関の紀要雑誌などから、海外での「ネットワーク」や「情報交換」といった歴史的背景を明らかにしようとする取り組みが出てきた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　５件）
①南 明日香、「東洋美術史家ヒューゴ・ムンスターバーグ(1916-1995)の軌跡: 中国古代美術から日本の民藝まで」、『相模女子大学紀要』、査読無、vo1.77A、2014 年、pp.15-35
②南 明日香、「二〇世紀初頭の鐔研究――ジョルジュ・ド・トレッサンを中心に」『相模女子大学紀要』、査読無、vol. 76A、2013 年、pp. 1-14
③Asuka MINAMI, traduit par AlainBriot, « Les études sur tsuba au début du XXe siècle : Georges de Tressan et son entourage », 査読無 *Le Bulletin l'Association franco-japonaise*, n°118, automne 2013, pp. 30-40 ; n°119 hiver, 2013, pp.22-26
④南 明日香、「西洋における水墨画の受容: コレクション紹介と文献絵画史の時代」、『ジャポニスム研究』、査読無、33 号別冊、2014 年、pp.49-61
⑤南 明日香、「ジョルジュ・ド・トレッサンの室町時代の絵画論――水墨画はどのように評価し得たか」、『ジャポニスム研究』、査読有、32 号、2012 年、pp. 14-27

〔学会発表〕（計　３件）
①南 明日香、「西洋における水墨画の受容」、ジャポニスム学会、第 3 回畠山公開シンポジウム　水墨のジャポニスム　―越境する書と画、帝京大学霞ヶ関キャンパス、2013 年 10 月 18 日、19 日
②Asuka MINAMI, "Münsterberg & Munsterberg: Two ways toward the study of East Asian Arts", International American Studies Association (IASA) 6th World Congress, Szczecin, Poland, August 4th, 5th , 6th 2013
③Asuka MINAMI, "Georges de Tressan (1877-1914), officier, historien des arts japonais et collectionneur de gardes de sabre, autour de ses années à Rennes", , organisé par l'Université Rennes II, Colloque intenational Territoires du Japonisme, Rennes, France, 27, 28, 29 septembre 2012

〔図書〕（計　4 件）
①南 明日香 他、ゆまに書房、『両大戦間の日仏文化交流 REVUE FRANCO-NIPPONNE 別巻』、2015 年、pp.313-321
②南 明日香、『国境を越えた日本美術史 ジャポニスムからジャポノロジーへの交流誌 1880-1920』、藤原書店、2015 年、398p.
③Asuka MINAMI, alt. Presse universitaire de Rennes, *Territoires du Japonisme*, 2014, pp. 65-77
④南 明日香 他、ゆまに書房、『満鉄と日仏文化交流誌『フランス・ジャポン』』、2012 年、pp.300-316

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
南　明日香（MINAMI, Asuka）
相模女子大学・学芸学部・教授
研究者番号：２０３２９２１２

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：